（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	高村 伸吾
論文題目	コンゴ民主共和国東部における流通ネットワークの再興と社会変容		

（論文内容の要旨）

本論文は、紛争によって深刻なダメージを受けたコンゴ民主共和国（以下「コンゴ」と記す）東部の流通ネットワークが、地域の人々の手によっていかに再興されているのかを実証的に明らかにしたものである。これまでの紛争研究においては、「国家の崩壊」や「秩序喪失」といったタームは頻出してきたが、現地の実情に照らした議論が展開されることは少なかった。本論文では、この地域においてこれまで誰も試みなかった長期の実踏調査に基づき、現地に居住するロケレ、トポケ、ボンガンドの3つの民族集団における生計戦略や流通構造の変化を記述し、国家不在とも言える社会条件における人々の営為と、それが持つ意味について考察した。

第1章「序論」では、これまでのアフリカにおける紛争研究の議論を整理した上で、本論の視座と研究課題について述べている。

第2章「対象地域と調査方法」では、調査をおこなったコンゴ東部の地理、生態、社会環境について概観した後、調査地域の選定過程、調査の経緯と手法を述べた。次いで研究の背景となる、植民地期以前からベルギー植民地期、独立、1990年代のコンゴ戦争に至るコンゴの歴史を、文献資料に基づいて詳述した。

第3章「紛争後における森林－都市流通の回復」では、1990年代以前の調査地域における経済状況について記述した後、その後勃発したコンゴ戦争の影響とそれに対する人々の対応を、主として森林地帯に居住する農耕民ボンガンドとトポケの事例によって示した。まず、紛争による流通システムの荒廃に対応して、農村部の住民たちが実践する、数百キロメートルにおよぶ「長距離徒歩交易」に着目し、森林内部で生産される商品がいかなる流通経路を通じて都市へと移出されるのか明らかにした。次いで、紛争後、森林地帯、河川、都市を結ぶ結節点として定期市が重要な役割を果たしていることを指摘した。さらに、トポケの人々が自らの手によって、崩壊した自動車道路の橋を再建し、地域の交通網を再構築した事例を報告し、トポケ社会に内在する課題と、「コレクティブ・インパクト」の可能性を示した。

第4章「チョポ州における定期市」では、調査地域に居住する農耕民たちが産物を売りに出す先である、大都市近郊の定期市について記述した。チョポ州の州都キサンガニから内陸農村部に至る広域調査の結果を踏まえて、まず、定期市の分布と規模を示し、その分類をおこなったあと、定期市の起源と歴史的変遷について記述した。次いで現在の定期市の相互のつながりと、紛争前後に新たに導入されたブリコラージュ的

な流通テクノロジーについて述べ、地域流通を担ってきた人々がいかにしてローカルな経済構造を打ち立てたのか、そして紛争前後に生じた流通構造が地域社会にいかなる影響を及ぼしたのかを考察した。

第5章「コンゴ河川商人の商業実践」では、今日の定期市の活況がどのような商業実践によって支えられているのかを、商業に従事する商人の活動の民族誌的記述から明らかにした。まず市の商人の属性、民族構成、移動手段について大まかな分類を行った。次いでそれぞれのカテゴリーの商人たちがいかにして商業活動を営んでいるのかを、彼らの日常活動を通して描き、彼らが用いる伝統知識や価値判断、社会関係を紡ぐ彼らの特性を抽出した。ライフヒストリー調査を通じて得た知見をもとに、それぞれの商人が辿る商業拡大の過程を描き、零細商人たちがどのようにして変化に対応しつつ利得を積み上げているのかを明らかにした。

第6章「討論」では、本論文の結論として、零細商業の潜在力についてこれまでに提示されてきた「静かな革命（Silent Revolution）」、「異人性（Marginality）」、「内発的発展（Endogenous Development）」という三つの分析概念を用いてこれまでの研究結果の整理を行い、冒頭に掲げた研究課題についての本研究から得られた解答を示した。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

コンゴ民主共和国は、1990年代半ばから2000年代はじめにかけて「アフリカ大戦」とも呼ばれる、第1次・第2次コンゴ戦争を経験した。この紛争によって、これまで国家や外来資本の力によってかろうじて維持されていた国内の水陸ネットワークは大きなダメージを受け、地域住民は物資の輸送に多大な労力を費やさざるを得なくなった。たとえば、申請者の調査地のひとつであるチュアパ州においては、森林の中の小道を伝っての、数百kmにおよぶ徒歩交易がおこなわれている。本論文は、このような状況に陥った流通ネットワークを、地域住民がいかにして再構築しているかについて実証的に示したものである。

本研究の学術的貢献としては、以下の3点を挙げることができる。

第1に、紛争後のコンゴ民主共和国東部を世界ではじめて広域に踏査し、流通の実態を明らかにしたことである。この地域は、農業生産性が高いこと、コンゴ河を介した大規模な流通が可能であることなどから経済的に重要な地域であり、紛争前においては、東部のナンデ商人を扱ったMacGaffeyの研究や、中心都市キサンガニ近郊の米の流通を扱ったRusselの研究などが知られている。しかし紛争後における実証的研究は、本論文を除いては皆無であると言ってよい。申請者は予備調査において、チュアパ州ワンバからキサンガニまでの500kmの悪路を走破し、GPSを駆使しつつ「どの地点で橋が落ちているか」等の交通の状況を詳細に記録した。次いで、自らバイクを駆ってチョポ州、チュアパ州の70以上の主要な市場を訪れ、あるいは物資を満載した商人の丸木舟に同乗して河川沿いの「市場リング」を巡って調査をおこなった。こういった困難を極める踏査によって、この地域の流通と市場の全容を明らかにすることに成功したのである。

第2に、コンゴ戦争のような地域紛争の困難を、新たな秩序生成の過程として再解釈する視点を導入したことである。たとえば本論文の第3章では、民族集団ロケレの人々が自らの手で自動車道路にかかる橋を補修し、交通ネットワークを再構築しようとする努力に、申請者がアクション・リサーチ的にかかわった経験が記述されている。また第4章では、鋼鉄船の運行がなくなったコンゴ河において、人々が伝統的知識と外来の技術を組み合わせ、ラドー（複数の丸木舟を連結し、ヤマハ製のモーターをつけた旅客輸送用の船）、バリニエ（キブ湖で用いられていた技術を導入して作られた大型の構造船）、ジャンクファー（中国製のディーゼル発動機にスクリューを組み合わせて作られたバリニエのエンジン）といった輸送手段を開発していくさまが描かれている。そこでは、これまで等閑視されてきた人々の潜在力や対応ダイナミズムが描き出され、そこから内生的な地域復興のありかたが模索されている。

第3に、一地点に留まることなく、都市と農村、森と河川といった広域の社会・生態環境を横断した調査をおこない、さらに、ロケレ、トポケ、ボンガンドという3つの民

族集団にまたがる比較をおこなったという点である。そこから明らかになったのは、もともと河川交通に携わり、交易民の性格を持っていたロケレのみならず、農耕を営んでいたトポケ、ボンガンドの中にも、交易民的な志向を持った人々が現れてきているという事態である。申請者はこういった動きを、網野善彦の唱える非定住民のイメージと重ねて論じている。しかしそもそも調査対象であるバントゥー系の人たちは、2000年以上前から、バントゥー・エクスパンジョンと呼ばれる民族大移動をおこなってきた「移動の民」であった。したがってロケレ的な移動性は、この人たちが元来持っていた性質であり、それが植民地期とそれに続くザイール時代のモブツ政権下で抑圧されてきたのだ、と考えることも可能である。この点については、申請者はバントゥーの歴史の検討を踏まえて、さらに考察を深めていくことが期待される。

以上のように本論文は、広域の現地調査によって得られた豊富なデータにもとづき、現地の人々が流通をめぐる困難へどのように対処しているかを明確に描き出した地域研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年3月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。